

若手教員、学生、社会人を対象に

教師志望

人材育成 —— 大阪 中之島

兵庫教育大学大学院同窓会 副会長(研究部長) 中尾 豊喜

「いま、学校の先生になりたい人が多い」と近畿地方の学生達から聴きま
す。その動機は、親の期待や安定感だ
そうです。なるほど、職員室には新卒
から三十代後半までの新任教員が続々
とやってきましたが、彼らが求めること
は、すぐに使える教材や指導方法です。
この現実には少々困惑しています。
この辺りが今回の主題です。

さて、教育公務員への道は、都市部
では既に広き門になっています。今後
は地方でも同じ状況でしょう。この教
員採用の軋みや年齢構成の歪みは、学
校文化に何らかの変容を来たすよう、
危惧の念を抱きます。例えば、同僚性、
教育観(学力観・生徒指導観)、保護者
との関係性などがそれです。

奇しくもこんな折、日本社会は市場
主義経済にあり、学校現場も遅れつ
つもネオリベリズムの影響による成果
主義的な思考、悪意はないが本質を見

失った表層・形式的な対応が蔓延つて

来しました。そして、この無批判な受け
入れ方の傾向には(まじめ)という重
大な勘違いも手伝って、結果的に教育
行為の公共性を縮め、各々の私事化を
増幅させました。偶然と言えるこの両
者の出会いは、《教育》にとつて可視化
されない極めて危険な現象なのです。

そこで、同窓会組織において研究部
門を担う大阪府支部では、この社会環
境の構造的な課題に応じた実践研究に
取り掛かりました。その場が教師塾の
先駆けとして平成十八年夏、梶田叡一
学長先生や川本幸彦副学長先生を迎え
開講した「中之島EDJセミナー」です。

ねらいは、技能取得のみにあらずし
て、「なぜ教員になりたいのか」「教員
になつて何をするのか、抱く志を確信
してもらうことです。その大志が人を
導き、かつ心を育む行為に繋がると考
えます。つまり、スキル偏重に陥るこ

となく、恒常的に「何のために」を自
問自答し、近未来の市民社会建設を射
程に構えた教師として、次世代育成に
使命感を抱き続けるからこそ、如何なる
事例も普遍的な指導を可能にする
と換言できます。

方法は、教員を志願する京阪神の国
公私立大学の院生・学部生、社会人、
幼・小・中・高校の若手教員を対象に、
講師や同窓会員が理論や実例を紹介し、
討議を真剣に行っています。文献輪読
会もあり、参加は無料です。

これまで、梶田学長先生の開講記念
講演以降、Darryl T. Yagi 先生の米国
「Career education」国語・算数・道徳
の授業法、生徒指導、子ども理解、キ
ャリア教育、発声法、鑑賞教育など実
施し、内容に応じ保護者やNPO職員、
企業社員とも合同で開きました。

四年目に入り、三月で五十七回を数
えます。昨年十二月より大学と共同研
究を組み、今後は都道府県連携推進本
部やコラボレーションセンター、更に
近隣支部とも連携を図りながら充実を
めざしています。受講者は、東は台東
区立小学校、西は神戸市立中学校へと
各地に新任として赴任しました。

しかし、彼らの半数は赴任地で二年
も経てば変わってしまいます。それは、
先述の成果主義的な思考への感化なの
か、現地で無意識に慣れ親しむのでし
ょうか、これまでの志は縮小していま
す。仮にこれを日本人の精神構造の特
性とみれば、例えば丸山眞男先生の「執
拗低音(Basso ostinato)」という教示
に照らしても、何が妥当かという論理
性ではなく、その場の雰囲気に従うこ
とを善としてしまつては、教員は「反
省的実践家」教師には成り得ません。

利点は継承しても、否な点の世代間
伝承は再考が必要でしょう。子ども、
大人にしろ、私はこの課題克服こそ、
正に《教育》という領域がなせる業と
考えます。ここに今回の人材育成構想
スキームの基点があるのです。



セミナー後の交流会

中之島「ダイビル」内

(19.Apr.2008 撮影:安藤なな子)